

矢島先生文化功労者受賞お祝い

72期 依田昌樹

昨年、10月、矢島先生の文化功労者受賞の報に接し、大変嬉しく思いました。改めてお祝い申し上げます。関東同窓会にこのような欄があることを知り、少し高校時代の思い出などを述べさせて頂ければと思いました。

高校時代先生のご担当は倫理社会でしたが、とても興味を引くユニークな話が多かったという印象を今でも持っております。当時、俳句をされる方とは知りませんでした。時々講義で普通の教師とは違う話をされていた記憶があります。例えばはっきり覚えていませんが、ある歴史上の人物が、気に入った仏像の前で「本当にいい仏像だ。といい、一晩前に座して酒を飲みかわしたんだ。」と、笑いながら話され、ユニークな歴史の話しと関心しました。

また、それと異なりますが、倫理社会の授業では自分の関心のある思想家一名を取り上げて調べ上げ全員の前で発表する形式を取られました。その際「日比谷高校では普通の授業形式ではなく、このように自分で発表する形が一般的」というようなことを言われました。とても参考になり、特に社会人になってからはプレゼンテーションを行う機会が多くなりましたが、いつも人前で発表する自らが一番勉強になると実感していました。

高校時代、個人的には詩、短歌に少し興味があり、当時取っていた「高三コース」なる月刊誌に高校同学年他クラスの女生徒が京都に修学旅行に行った際、そこでの初恋の感動を投稿し一席に入り(確か二首)、それに刺激され私も後の刊に投稿し、短歌二首が二席に入りとてもいい思い出になっております。なお、俳句は季語があり、若さの至か自由感が少し得られず、当時どうしても馴染めませんでした。

最近、所用で時々足を運ぶ地元の図書館に偶然石田波郷(読売文学賞、芸術選奨文部大臣賞)の特設会場があり(昭和21年～同31年江東区内在住)等身大の写真を眺め、どんな俳人かと常々思っていました。今回の先生の受賞を機にその人と句集に目を通してみました。石田波郷、加藤楸邨(蛇笏賞、朝日俳壇選者、紫綬褒章、勲三等瑞宝章、現代俳句大賞、朝日賞など)と師事されたとのことで、そう読んで読むと、石田波郷の俳句と、これら詩人が生きた戦中戦後の大変だった時代に特別の思いと感情を覚えました。

なお、読売新聞の俳句選評欄で、時々先生の句評に興味を持ち読ませて頂いていましたが今回、紀伊國屋書店で先生のベスト100句集(ふらんす堂刊)を購入し、ページを開いた最初の一句には重い感動を覚えました。それは壁に、次の行動を躊躇うように揺れる大きな蚊の姿に、大学卒業を控え(ご専門は平城京史とか)、卒論を書きながら進路に迷っているご自身の姿を投影された句でした。地元で健康を害された御母堂と奥様を置き、待たなしで進路を決めざるを得ない揺れる気持ちを讀まれた句とのこと。解説には「二年前に御尊父(父)を亡くし、退路は無かった。多難な前途だけは確かだった。(1958)」とあり、差こそあれ誰もが経験するこの時期の感情を鮮やかに想起しました。

矢島先生と同じ昭和10年生まれは当時大江健三郎(「飼育」で芥川賞)、柴田翔(「されど我らが日々」で芥川賞)、また、昭和12年生れは庄司薫(「赤ずきんちゃん気をつけて」で芥川賞)、昭和9年生れ海老坂武(仏文学者、「シングル・ライフ」が大ベストセラー、サルトル翻訳等)など他にも様々時代を揺るがす著名人が輩出されていた時代かと察します。高度経済成長に向かう時代、多くの選択の可能性の中でご自身の進路を考える句と姿に共感と感動を覚えました。

様々、勝手に感想を述べさせて頂き、申し訳ありませんでした。率直な当時の感想、意見とご理解頂ければ幸いです。

先生には是非ともご健康、ご長命であられることを期待致します。そして更に作句、俳句選者、評論その他で益々活躍されることを期待させて頂き、御祝の言葉とさせて頂きます。

